



## 啄木の「ふるさと」に思う

県立会津養護学校教諭

渡部 ミチ子

学生だった時、恩師が雑談で、「啄木や賢治のような欠点だらけの人をあんなに有名にしてしまふのだから、岩手県の人には偉いね。才能ある人の足を引っ張る地域だって多いのに」と話されたことが心に引っ掛かり、啄木や賢治に関心を持つようになりました。また、高村光太郎が晩年岩手県奥の山奥に籠ったことや、立原道造が盛岡に旅して「光ある世界」を感じたことなどを知ると、単純そのものの私は、岩手県がすっきり理想郷のように思えてしまいました。

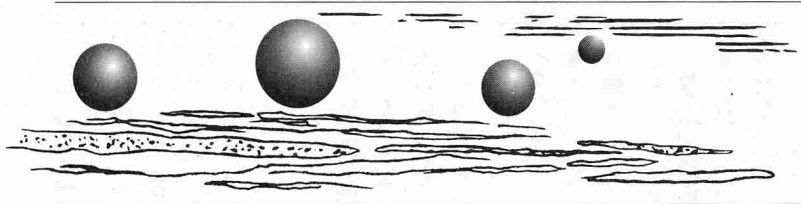
啄木が浜民村を激しく恋うたのは、漂泊を余儀なくさせられたからで、故郷から引き離された不安定な暮らしの中で、強く心の拠り所を求めていたのでしょう。早熟ゆえに早くから文学に目覚め、感受性の鋭さゆえに社会状況にも敏感に感応し、壮絶なまでに貧困と病苦のうちに終えた一生。二十歳で一家を扶養していたいかなければならなかったことを思うと、よく世事に毒されず理想を求めて生きたなと思えますが、反面、同じ女性として妻節子の立場に視点を置いて見ると、私は生活者としては決

て立派とは言えない啄木を、全面的に理解することはできませんでした。

啄木のファンには年配者が多いと聞きます。夢を追い肩に力が入った生き方でも、苦しみの中から生まれた言葉の一つ一つが胸を打つのでしようし、無理に無理を重ねた人生をねぎらつてあげたいと思うのではないのでしょうか。

今ではもう岩手に住みたいとは思いませんが、何年に一度かはこの本を携えて訪ねてみます。最近では啄木の浜民村も私の生まれ育った会津もそう違わないように思えてきました。「ふるさと」が自分の心の拠り所を意味するのだとしたら、特定の地域にこだわる必要はないのかもしれない。自分の周りの人や自然を大切に生きていきたいと思うこの頃です。

本の名称…人と文学シリーズ  
石川啄木 現代日本文学アルバム  
著者名…井上光晴 他  
発行所…学習研究社  
発行年…一九九九年九月三日



## 心に残る

### 私たちが求めるもの —青い空、青い海。

県立勿来工業高等学校教諭

高原 綾乃



私の読書量は、人と比較して決して多い方ではない。しかし、その中にも本当に心に残る本とはあるもので、何年たつても不思議な程鮮明にイメージが焼き付いているものがいくつもある。そんな本の中に、私が高校生の時に初めて読んだ「遠い海から来たCOO」がある。後にアニメ映画になっていたので、かなり広く知られている物語かもしれない。当時の私にこの本は新鮮な衝撃を与えてくれた。

南太平洋に、古代の恐竜のプレシオザウルスの末裔が生息していたということからこの話は始まる。フィジーに住む日本人の少年の洋助が、生まれたばかりの恐竜の子供を偶然に発見し、クーと名付けて飼いはじめ。しかし、その恐竜の生息海域で核実験を行う予定であったフランス政府は証拠隠滅を図る。洋助たちは否応なしの政府諜報機関を相手に戦わねばならなくなる。クーを守り、自然を守る為。

実際にはあり得ない冒険ファンタジーであるが、全編を通して描かれる南国の空の青さ、海

の輝き、そして人と動物の純粋な友情が、私たちのあるべき姿を教えてくれるような気がする。大自然の中で人と動物が一体になれば「動物保護」という考え方もなくなるのかも知れない。言い換えれば、この物語には地球の理想とする姿が凝縮されているのだ。それも、少年や、イルカや、犬や、クーの生き生きとした姿を通して。あるいは、核爆弾や権力に固執する人間の愚かさを通して。

最近になって読み返してみると、これは単純な友情物語なのかななどと思う時もあるが、やはり私たちが求めるべきものは地球本来の姿であり、他の動物との共生なのだろう。だからこそ、私の心の中には青い海を泳ぐクーやイルカが住みついて離れないのだと思う。

本の名称…遠い海から来たCOO  
著者名…景山民夫  
発行所…角川書店  
発行年…一九八八年八月五日  
本コード…ISBN  
4001875851